



前回より

そもそも井戸はいつ頃からつくられ、そして井戸に対して人々は、どのような信仰を抱いていたのでしょうか。

井戸のはじまりについては、縄文時代以前の井戸遺構が発掘されておらず、現在のところ弥生時代からと考えられており、同時代中期になると発掘例は増加し、それらの井戸から祭具が出土することから、井戸の出現から時を経ずして祭祀も始まったと考えられています。

井戸の祭祀

祭祀の様相は、7世紀後半から10世紀頃までの律令時代に入ると明確になり、大阪府堺市の大庭寺遺跡では、掘方（井戸側および水溜めの外側部分）から木槌が、井戸底からは「清水」「上」「水」と墨書した土器が見つかっています。

大阪府羽曳野市の野々上遺跡では、井戸の底から土器の甕9点が、3列×3列で並べられて出土しています。

安倍晴明と井戸

その3 土公と犯土

この井戸は8世紀の中頃に使用されていたと考えられていますが、井戸を埋め戻した後の地表近くに、9世紀代の土器の杯が据え付けられていました。これは井戸が使われなくなつて長い時間が過ぎた後でも、そこに井戸の神が宿ることを示すための祭具だったと考えられています。

このように廃井戸にも祭祀が行われたのは、いかなる信仰によるものでしょうか。



井戸を埋戻した後に設置された須恵器甕と土師器皿 大阪府野々上遺跡 (羽曳野市教育委員会所有写真)

地下の他界に住む神々

現代の私たちは、神の国といえど天上界をイメージしますが、古くは「神は地下にある他界に住む」と考えられていたという説があります。

民俗学者の佐野賢治氏は、日本には体系的な星神信仰が存在しないと指摘しており、一方で『古事記』にはイザナギが黄泉の国を訪れたり、オオクニヌシがスサノヲの住む根の国に赴くなどの話が見られることから、いにしえの日本人は星が瞬く天空よりも、地下にある別の世界を強く意識していたというのです。確かに『古事記』や『日本書紀』をみても、星の話や神々はほとんどみられません。

井戸は神の通路

発掘された井戸を見ると、自然堆積によって埋没するに任せておき、一気に埋め戻していかないものが数多く発見されるといいます。

これは、井戸は地下の他界と私たちの世界を、神々が行き来する通路であり、急激に埋めてしまうと、井

でした。

土に住む土公という神と、土を深く掘ることによって崇られるという思想は、地下に他界があるという古来の信仰を受け継ぐ人々にとっては、受け入れやすかったでしょう。土公は、平安貴族たちにとって大変身近で、そして大変崇りやすい神として恐れられていったのです。

土木事業の空白期

この犯土思想については、10世紀をピークとして9世紀から11世紀にかけて「土木事業の空白期」を生み出したと指摘する研究もあるほどです。ただし、この時期には荘園制が発達し、中央集権体制が崩壊したため、大規模な土木事業ができなかったなど、別説もあるので真偽のほどは確かではありません。

しかし、『朝野群載』に掲載された賀茂保憲による犯土に関する説明文が、「勘文」(朝廷からの諮問に対する報告書)であったことを考えれば、犯土思想が当時の政治にある一定以上の影響を与えていた可能性はあります。

井戸と陰陽師

しかし、大規模な土木事業はともかく、人が生きていくうえで、どうしても三尺以上、土を掘らなければならぬ場合があります。それが井戸だったのです。

井戸から水を得るためには、地下の帯水層まで穴を掘らなければなりません。それは、91cm以内という

わけにはいかない場合も多々あったことだと思われれます。実際、犯土思想が華やかなりし時代にも、それ以上の深さの井戸遺構が見つかっています。そして、井戸を掘削する際に土公の祟りを避けるための場所と方角を教授し、万一それがかなわない場合には土公を鎮めるための土公祭を行い得る存在が、外ならぬ陰陽師だったのです。

おわりに

9世紀から11世紀の間、土を掘る行為自体が避けられた時代に、陰陽師たちはつつがなく井戸をつくるための祭祀を執り行ったため、人々の意識に井戸と陰陽師が深く関連付けられたのは想像に難くありません。貴族相手の井戸の祭祀は、官人陰陽師のみならず、法師陰陽師のような民間陰陽師も執り行うようになり、さらには広く民間へと伝わっていったのではないのでしょうか。

例えば中世に、井戸掘りに関する専門の技術者であり呪術者であった河原者は、その流れで誕生したのではないかと考えています。前回述べたように、彼らの中には近世にいたつて、土御門家支配下の陰陽師になった者もいたはずであり、各地で井戸の掘削と祭祀を行ったことでしょう。こうした考えを証明する史料は残されていないようですが、安倍晴明伝承と井戸の関係が、その証拠であるように私には思えるのです。

(文：江口知秀)



六道珍皇寺にある霊異途の井戸(京都市東山区)。平安時代の貴族だった小野篁が、間魔王の裁判を補佐するため、この井戸から冥界に通ったという伝説がある(2011年撮影)

るようになっていました。では、なぜ彼らが井戸の祭祀を司るようになっていったのでしょうか。この時期の井戸からは、「土公水神王」と墨書された土器の皿が見つかっており、「土公」と「水神王」の二つの神を祀っていたことが明らかになっています。



井戸から出土した「土公水神王」と墨書された土師器皿 嶋上郡御跡(大阪府高槻市)(大阪府立狭山池博物館(編)「水にうつる願い 平成18年度特別展図録」p.32より転載)

土公

土公は、どここう、どここう、ちぎみなどと読み、土のエネルギを人格化したもので、中国の三国時代の史料にはすでにその名が見られ、日本には9世紀半ばには伝わっていたと考えられています。

土公は、地中を住処としながら季節ごとに居場所を変え、または60日